

## 研究可能テーマ

研究可能テーマ	研究指導者	受け入れ可能院生数
<p>(1)皮膚バリアー機能における角質細胞間脂質の役割についての生化学的検討</p> <p>皮膚バリアー機能を司る、最も重要な構造は角層であるが、特にその角質細胞間に存在する表皮由来の脂質の果たす役割が注目されている。その角質細胞間脂質の50%を占めるのがセラミドであるが、剥離した角質のセラミド量を定量的に解析する方法を確立し、バリアー機能の低下が臨床的に推定されるアトピー性皮膚炎患者でのセラミド量の低下を証明している。さらに、その低下が脂質代謝酵素異常に起因していることも報告してきた。この酵素異常を是正することにより症状の軽快が得られる可能性もあり、薬剤開発に結び付くことも考えられる。</p>	川島教授	1
<p>(2)難治性皮膚疾患におけるピロリ菌の関与に関する研究</p> <p>慢性蕁麻疹、多形慢性痒疹をはじめとする難治性皮膚疾患患者でピロリ菌陽性者について除菌療法を行い、その有効性を検討している。除菌療法の前後で、QOLを調査し、その解析も行っている。ピロリ菌の除菌療法が有効であることが確認されれば、今後治療法の確立につながり、疾患の発症メカニズムの解明にも結びつくことが考えられる。</p>	石黒准教授	1
<p>(3)アトピー性皮膚炎におけるサイトカイン・ケモカインの関与に関する研究</p> <p>アトピー性皮膚炎の病態には免疫反応が深く関与しているが、その中でサイトカインやケモカインは重要な役割を果たしている。サイトカインやケモカインは表皮細胞、浸潤リンパ球、血管内皮細胞、樹状細胞など種々の細胞によって産生され、お互いの活性化や遊走などを司っている。アトピー性皮膚炎の病変部や末梢血中で増加しているサイトカインやケモカインを同定し、その機能を <i>in vitro</i> で解析している。重要な働きをしているサイトカインやケモカインが見いだされれば、病勢マーカーとして利用でき、さらにはそのサイトカインやケモカインの阻害薬や受容体の阻害薬は治療に結びつく可能性がある。</p>	常深講師	1